

(別紙2)

論文審査の結果の要旨

氏名 福島 勲

20世紀フランスの思想界に特異な位置を占めるジョルジュ・バタイユ(1897-1962)の活動は、文学・思想・宗教・芸術・政治・社会学・人類学などの多岐の領域に及び、しかもそれらの対象領域を自在に横断して思索し論ずるところにその特徴があるが、それだけに彼の思想の可能性の根源を見極めることは困難である。本論文は、宗教儀礼の中心にあると考えられる供犠のテーマが、彼の著作に頻出し、宗教、芸術、エロチスム、政治の領域を橋渡しする役割を担っていることに着目し、バタイユの思想において供犠の持つ意味を解明することを課題とする。その際、たんにバタイユが供犠について、いかなる思考を展開したか、また供犠が彼の思想形成においていかなる役割を果たしているかを考察するにとどまらず、文学の存在理由と価値の根源に供犠があることをバタイユ自身が確信しており、そのことを文学の実践及び文学に関する理論的反省を通じて実証していたことを、彼の著作の緻密な読解によって示そうとする。こうして、本論文は、バタイユ固有の問題を越えて、文学の意味と価値を背後から支えている要請に光を当て、文学が、本来的な人間の交流の空間を創出し確保する営みであるとの見通しを提示する。

全体は三部からなり、第一部では、キリスト教神学及びフランス社会学において、供犠がいかなるものとして捉えられていたかを考究する。これは、バタイユ自身、一時キリスト教信仰に帰依したこと、またデュルケムやモースが、「聖なるもの」と「社会的なもの」の関係を重視し、それとの関連で供犠に強い興味を寄せたこと、そしてその成果をバタイユ自身が熟知していたことを思えば、バタイユの供犠観を理解するために不可欠な予備作業である。第二部は、初期から中期にいたるバタイユの著作に即して、彼が供犠についていかなる観念を抱いていたか、またそれがどのように変遷を遂げていったかを跡付ける。初期においては、破壊を通じて「聖なるもの」という異質の価値を作り出すものという説明がなされるものの、統一的な供犠観はまだ形成されていないが、1930年代後半になると人類学と社会学の成果に触発される形で、共同体統合の契機としての供犠という見方が出てくる。しかし第二次世界大戦中に執筆された『内的体験』や『有罪者』においては、それまで供犠の成立の背景として実体的に捉えられていた「共同体」に取って代わって、自由な人間同士の「交流」という運動が前面に押し出される。また供犠の演劇性に注目することを通じて、現実の供犠から表象された供犠への転換が図られる。「内的体験」とその言語表現は、表象による供犠の再現行為だということである。これを受けて、第三部では、文学が、書く行為と書かれたテキストの双方の契機、とりわけ後者において、交流への意志に貫かれた供犠であり、それが文学の存在理由と価値の基盤にあることを、二つの著作『内的体験』及び『文学と悪』、とりわけ後者に収められた「ジュネ論」に即して主張する。供犠が死を通じて開示される聖性の仲介により参加者たちの交流を可能にしたように、文学は至高性の仲介によって、意味や有用性に回収されることのない他者との関係、すなわち「交流」を樹立するというのである。

本論文は、テキストの緻密で執拗な読解に加えて、その宗教的背景のみならず、社会学・人類学的背景を、フランス社会学の伝統のうちに探索し、バタイユの思想の理解に役立つ多くの知見を提出している。テキストに密着するあまり、論者の立論がくっきりと浮かび上がらないこと、概念操作とその表現に厳密さを欠くところが見られるなどの憾みはあるが、全体として、供犠という鍵概念を駆使して、バタイユの思想と著作活動の特質を浮かび上がらせることに成功している。以上から審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に相当するものと判断する。